

元気かいだ!

Q&A

読者からの質問、疑問にお答えするコーナーです。

針治療についての質問が寄せられました。

どのようなときにどんな効果が期待できるのでしょうか。

千葉県医師会顧問

鈴木弘祐 医師



現代医療の中での針治療の位置づけ 針治療の役割

ーT化の進展に伴い遺伝子治療はじめ医療技術の発展はめざましく、がん疾患をはじめ難治性疾患の克服にも明るい展望が見られる一方で、案外日常的な疾患に意外に苦しんでいる方々や、原因の解明されぬ難病に十分対応できぬ例、治療法に副作用が多く苦勞されている例、経済的に支障をきたし、治療に躊躇するケース等々が見られるのも事実です。

そのような中で、東洋医学である針治療はこれからご紹介する種々の特性から、かなりの医療効果を上げており、人間自身も自然の生態系の一部を構成

していると考えると針治療は自然環境保全に十分寄与しているのではないかと考えられます。

治療可能な患者さん

薬物アレルギーを有する者、妊娠中・授乳中の者、肝腎機能障害を有する者、消化器潰瘍のある者、多剤服用中の者など薬剤が使用不可能あるいは制限のある者、体力が著しく低下した者でも年齢・性別を問わず安全に治療を行う事が出来ます。

安全性、効率性、即効性、汎用性、簡便性

身体を傷つけるなどの侵襲性がなく極めて安全性が高く、治療に伴う痛みも軽微、使用する皮内針もデイスボーズパルで問題なく、副作用はありません。費用対効果の大きさ、同時に他疾患合併例にも対応可能で効率性は顕著、痛みの消退をすぐに確認できるケースも多く、外傷時に筋腱断裂の有無等の判断も容易、簡便な麻酔手段ともなり得ます。

また、診療科目を超えて、プライマリ・ケア医として同時に広く対応できます。高齢者の運動不足による筋萎縮や脳血管傷害者等のリハビリにも対応しており、色々な方面に広く用いることができます。高価な設備機器が不要で旅行や日常の外出時も常に携帯可能な多くの利便性が認められます。

針治療の理論

身体表面には60穴以上の経穴(ツボ)があり、規則的な循行ルートを形成し生体維持に欠かせない氣血がめぐっています。整形外科では有痛性の疾患が多く、経絡学説に基づき痛み部位の属する経絡上の有

効性の高い経穴を中心として、体質・年齢・経過、更には特定臓器の疾患を合併している際は経穴の臓器特異性(特定の臓器との強い関係)等も考慮するなどして取穴し、鎮痛と臓器異常の改善を同時に治療することが出来ます。

科学的根拠として4000年に及ぶ人間を対象とした治療の結果であろうと考えています。鎮痛の仕組みについては経脈の氣血の不通による痛みが針の経穴刺激によって支障なく通じる疎通作用で「通すればすなわち痛まず」という経験則にのっとり、臓器疾患は経絡を通じて臓器の氣血の不足を補ったり、うつ滞等の疎通をはかったり、虚・実として表徴される病的状態を取穴法や手技で調整し本来あるべき状態に戻すことと考えられ、人間自身の本来的に保有する資質・材料を巧みに活用しているものと理解しています。

針治療上での留意点

急性疾患は一般に改善が早く鎮痛が先行するため、早期について無理して再発することがあり要注意です。慢性経過をとる脊髄神経疾患等は日時を要する傾向があり、短期間で諦めず継続が大切です。針治療は原疾患を西洋医学的に十分理解した上で行われるべきものであり、画像診断等による精査に際しては混合診療への配慮も必要です。西洋医学と東洋医学はお互いに補完し合うことで多くの患者さんが救われると考えています。

皆さまからの質問募集中!
千葉県医師会 広報課まで